

コンバインによる大豆の収穫作業。セラード農業開発に後押しされ、ブラジルの大豆生産量は、989万トン(1975年)から5,785万トン(2007年)にまで拡大した



「不毛の地」が
一大農業生産地帯に

ブラジル中央部の広大な熱帯サバナ地帯「セラード」。その面積は約2億ヘクタール、日本の国土の約5・5倍にも匹敵する。農業大国ブラジルが誇る一大農業生産地帯であり、大豆、綿、野菜、果物、コーヒーの生産のほか、畜産なども盛んだ。それ故、かつてこの地が、「灌木と赤土の荒涼とした原野だった」という事実には驚く者は多い。大陸で最も不毛な、半砂漠の地域。この地を訪れたフランスの社会人類学者、レヴィ・ストロースはそう表現したという。ブラジルの母国語・ポルトガル語で「閉ざされた場所」を意味するセラードは、文字通り、農業など到底できるはずのない「不毛の地」と長らく考えられていた。そんなセラードが、後に世界有数の農業生産地帯へと変化した原動力の一つが、日本とブラジル政府の協力で1979年に始まった「日伯セラード農業開発協力事業」だ。JICAをはじめ日本は22年間で280億円近い融資を行い、約35万ヘクタールに及ぶ農地の造成や灌漑施設の整備、農業組合の設立など

からセラードに入植してきた日系人も、農地開拓に大きな役割を果たした。今も多くの日系農家がこの地域の農業を支えているほか、日系農家の下で技術を学び、成功した現地の小規模農家も少なくない。「セラード開発の功績の一つは、世界の食料供給の安定に貢献したということ」と話すのは、長年にわたってこの事業に携わってきた本郷豊JICA国際協力客員専門員。「例えば大豆は、今や輸出量でアメリカと並ぶまでに成長しました。輸出拠点が二極化したことで、世界の穀物生産や国際価格の安定にもつながっているのです」。一方、こうして農業大国となったブラジルが、近年、国を挙げ



日伯の知見を世界へ

世界の食料事情を大きく塗り替える、劇的な農業発展を遂げたブラジル。その原動力の一つは、広大な不毛の地「セラード」を一大農業生産地帯へと変ぼうさせた日本とブラジルによる農業開発事業だった。その経験が今、日伯の知見として、南米大陸を飛び出そうとしている。

を支援。技術協力の分野でも、JICAが専門家を派遣し、現地の農業研究機関の研究能力の向上や人材育成、土壌・品種の改良、栽培技術の改善などに努めてきた。その結果、セラードは大豆、綿、コーヒーに代表される大規模農業、果物や野菜といった中・小規模農業、また畜産など、多様な農業が行われる大農業地帯へと生まれ変わる。その過程では、ブラジル南部

で力を入れているのが、化石燃料に代わるバイオエタノールなどの燃料開発だ。気候変動対策として国際社会からも大きな注目を集めている。そうした中JICAは、油糧作物の生産を通じて小農の生計向上を目指し、リオグランジ・ド・ノルテ州で、燃料の元となるヒマワリなどの生産・流通チェーンの構築を支援。また、燃料(エタノール)用の生産が拡大し、食料(砂糖)への影響が懸念されているサトウキビについては、日本の科学技術を活用し、砂糖となる糖液を茎から搾った後の「かす」(バガス)を使ったエタノール生産の技術の確立に協力している。さらに、干ばつなどの環境ストレスに強い大豆の品種開発にも今後取り組む予定だ。

モザンビークで生きる
セラードの経験

そして今、アフリカ南部・モザンビークでは、日本とブラジルが手を組み、セラードの経験を生かした食料生産の拡大と人々の生計向上を目指す支援が始まろうとしている。植民地時代の名残で、ブラジルと同じポルトガル語を公用語とするモザンビーク。近年は、ア



from ブラジル
BRAZIL

セラード地帯の原野を開拓して作られたトウモロコシ大規模農園

セラードで農業開発が始まったころの様子。2台のブルドーザーがチェーンをけん引し、灌木を倒す



ルミニウムの精錬事業などで経済成長を見せる一方、地方農村部では多くの住民が自給自足型の農業を営み、最低限の暮らしを強いられている。また、道路や灌漑施設などのインフラ不足も深刻だ。こうした中で、この国の発展に限りない可能性を秘めているのが、国土の約7割を占める、セラードと同じ地質の熱帯サバナ地帯。将来有望な農業生産地帯として、そして世界の食料安全保障の実現のカギを握る場所として、日本とブラジルも注目している。

農業試験場の研究能力向上支援や、総合的な農業開発計画の策定などを2010年度にも開始する予定だ。さらに、円借款を通じて、ナカラ回廊、農業インフラ、社会インフラの整備も行い、包括的な農業開発に向けた支援も検討している。他方ブラジルは、セラード農業開発での知見を、現地の研究機関などに技術移転していく考えだ。世界の食料事情を塗り替えた一大農業生産地帯を築き上げ、安定した経済成長を続けるブラジル。JICAにとっては、開発途上国の貧困削減や地球規模の課題に取り組んでいくための良き「パートナー」でもある。日伯の二人三脚による取り組みに、今、大きな期待が集まっている。

首都ブラジリアに並ぶさまざまな野菜。セラード開発によって、野菜や果物といった中・小規模農業も目覚ましい発展を見せた



モザンビーク



JICAの農業開発支援の舞台となる、モザンビーク北西部に広がる手つかずのサバナ地帯

写真提供：本郷豊